

Phragmipedium

「フラグミペディウム コバチー」

kovachii



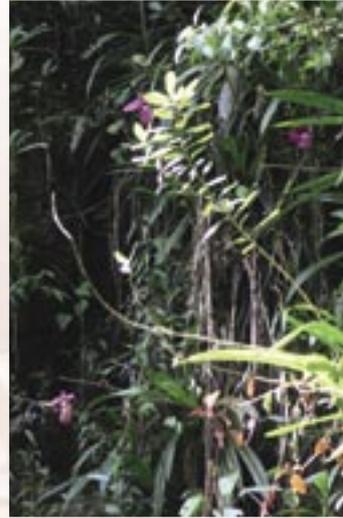
◀ 開花の途中で伸びかけと思われる花
じっくりと時間をかけて伸びていくと思われる



▲ 開花途中の花を後ろから



▲ コバチーが始めて見つかったと言われる切り立った崖。
わずかに残るコバチーが張り付くようにして育つ



▲ 斜面に生えるコバチーの大株。
かなり強い日光に当たりながら育っている

◀ 険しい崖のブッシュの中に育つコバチー

フラグミペディウムは南米を原産とする蘭で、パフィオの親戚とされているものです。20数種程度の原種が現在までに確認されています。30年以上前までは、薄ピンクの原種はあったものの、ほとんどがグリーンから褐色の地味なものであまりぱっとしない洋らんでした。1981年にペルーでベッセ (Phrag. besseae) が発見されると、その鮮やかなオレンジ色は瞬く間に洋らん界のスターとなり、その色彩を利用した数々の交配種が生まれました。時は経ち2002年にまたまたペルーで衝撃的な色彩と大きさを持ったコバチーが発見され大ニュースとなりました。極大輪のパープルレッドの花がペルー北部の密林で発見され、当初はperuvianumという名前で発表されましたが、わずか数日の差でkovachiiの名で先に発表されていることが分かり、こちらの名前が有効な原種の名前となりました。

以前でしたら発見されるとすぐに世界中に広まったものですが、今回は厳しいペルー政府の保護政策のおかげですぐに禁輸措置が取られ、その自生地も保護されることになりました。2004年の11月にこの自生地を訪ねるチャンスがあり、ペルー奥地アマゾン源流地域の密林までこの花を見に行ってきました。

カトレア・レックスなど多くの洋らんの原産地として知られるモヨバンバから車で走ること3時間少々、国道に車を止め獣道を山奥へ向かいます。(ガイドによればここから歩いて4時間程度とのこと。) 蒸し暑い密林の中をひたすら奥地へと向かいます。道がなくなれば川沿いを歩き、ひたすら奥へ奥へと進んでいきます。普段の運動不足が確実に現れ、果たして目的地へ辿りつけるかという心配をしながら歩きつづけること4時間、まずはコバチーが最初に発見された崖に到着しました。さすがにそこはもうほぼ取り尽くされていましたが、わずかに残る株に

花が咲いているのが確認できました。更に奥へ進めばまだまだたくさんあるとのこと。さらに30分ほど進むと切り立った崖上の斜面の下に出ました。この斜面にコバチーが沢山生えているとのこと。標高は1900mあたり、気温は24℃程度とさほど高くありませんが、湿度が高く蒸し暑い場所です。この崖を100m以上登るとまわりに沢山のコバチーがありました。開花したての花から満開になったもの、さらには崩れるように終わりかけの花などがあります。大きな株はリーフスパンが65cm、花茎は太く35cmほどに伸びNS15cmほどの大輪を咲かせています。蕾を見ると細かな毛がびっしりと生えていてこれまで見てきたフラグミとは異なる感じがします。生えている地面は腐葉土の堆積した土壌で、崖の上からの水分で常に湿っていて、歩くとふかふかした感じのする場所でした。また驚くことに、ほぼ直射日光に当たりながらも日焼けをおこすことなく育っていて、葉は厚みがありしっかりとしていました。

同じタイプのベッセと似た環境ですが、生えている場所はベッセほど濡れていない感じです。

この、世紀の大発見でもあるコバチーはペルー政府の保護政策の下、ペルー国内でフランス繁殖が行われ、やっと日本国内でも小さな苗が販売できるようになりました。またペルー国内で許可を得て採取された株を使った交配種もすでに出来ています。もう数年もするとこの素晴らしいコバチーやその交配種の花を国内でも見ることが出来そうです。みなさんもぜひ挑戦してみてくださいはいかがですか。



▶ ほぼ完璧な状態で開花するコバチー
リーフスパンは 65cm もある

◀ ペルー北部・アマゾンの源流地域の
ジャングル。この先がコバチーの自生地